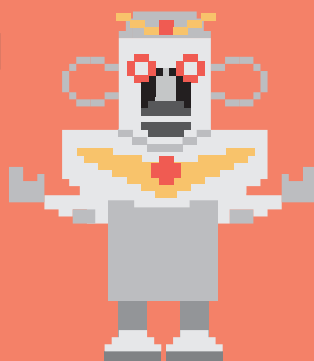
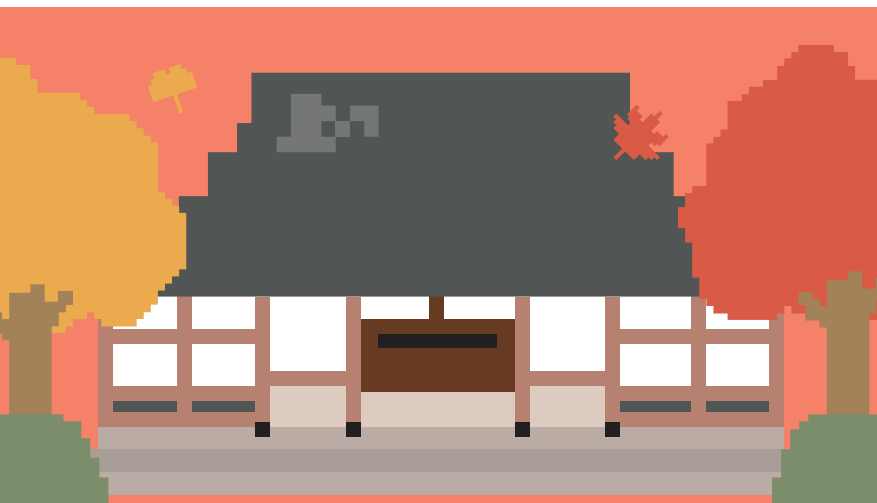


The wave traveling all over the world

テラ・ヘルツ



1

2022年
9月

はじめに

仏教離れが進む昨今。少し鎧、いや衣を脱ぎ捨てた表現でみなさまに大切なことを伝えていきたいという想いから、この冊子を刊行する運びとなりました。本誌のタイトル「テラ・ヘルツ」は、お寺の「寺」と未知の可能性を秘めた周波数の単位「テラヘルツ」をかけたものです。

この冊子が目には見えない小さな波となって、みなさまの心に届いたら……そんなふうに願っています。今後、みなさまの意見を伺いながらより充実した冊子をお届けできるよう精進していく所存です。

目次

凡愚のつぶやき	4
お寺の掲示板	8
教えて！ フダイシさま	10
くらしの知恵箱	13
こども部屋をノック	16
お坊さん WITH ナンタラ	18
煩惱ロボット メカムラケン	19
門徒さんのおたより	20

凡愚のつぶやき

骨の彼方に

昔昔、幼い娘と境内を散歩していた時のこと。

散歩の途中に「歴代住職、有縁門信徒の墓をお参りしよう」と思った
ち、墓前で手を合わせていると、娘が質問してきた。

「ここ遊ぶところ?」

「いいや。ここは骨が入っているとこよ。凛の先祖や門徒さんの骨が入
てるんよ」娘は、他の墓を指さし、

「これも骨が入ってるの? これは? これは?」



次々に色々なお墓を指さし骨の有無を確かめる。長いことお寺に住んでいるが、これほど骨の存在を意識させられたことはなかった。娘の「これはこれ」攻撃は続いた。キリがないので、

「これも、これも、全部骨が入ってるんよ。人間はみんな骨になるんだよ」と言い放った。

娘はハッとした表情を浮かべ「生死^{いのち}」の疑問をぶつけてきた。

「わたしも骨になるの?」

「そうよ。凜も骨になるんよ。じいちゃんも、ばあちゃんも、父ちゃんも、母ちゃんもみんな骨になるんよ」

そう答えると、少しの沈黙の後、

「わたし骨になりたくない!」と大声で叫んだ。

「骨になるのは悪いことやないんよ。自然なんよ」

ともっともらしく諭した後、身体になんともいえない違和感を覚えた。「違う……身体は骨になるけれど、浄土に生まれ仏さまにならせて頂く人生だったな」今更ながらしみじみと思い、

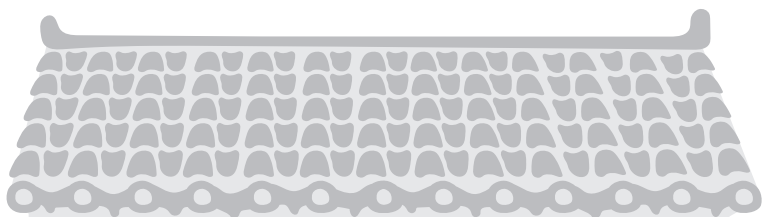
「ごめんね。父ちゃん間違っと思った。みんな『仏さま』になったんよ。骨は抜け殻なんよ」と、境内で拾った蟬の抜け殻を見せながら答えた。その答えに納得したのかわからないが、娘は黙った。

考えてみれば、親も友人も嫁も兄弟も子供も、いつか骨になり本当の別れの日が訪れる。とても辛く、受け入れがたい。しかし、絶望ではない。無量のいのちに摂めおさとられ、仏さまにならせて頂く尊い人生をお互

い歩んでいる。「死んで無になっていく」のではなく、「浄土への歩みを
一歩一歩重ねている」のだ。

限りある己の蠟燭ろうそくが容赦なく燃え続ける中、太陽が西の空を真っ赤に
染めた。





お寺の掲示板

いくたびも

背^{そむ}きし父の

墓洗う

いろいろな想いが昇華
され、墓前では不思議
と素直になれます。家
族という関係は続いて
いきます。今までのよ
うに、これからも。

以前、新聞に掲載されていた歌
がありました。

「父の日記開けば涙あふれきぬ
わが家出せし後の日記」

想像ですが、父との意見の相違
から家を出て、自分の道を歩いて
きたのでしょうか。父の訃報に接し、
葬儀のため家に帰り、父の遺品の
日記を読んだところ、自分が家を
出た後の日記には、家出した自分
を「責めることば」はどこにもな

く、「心配することば」ばかり……その親の想いに触れた時、涙があふれてきたことをうたっています。

親が生きているうちにその思いを知ることができなかった後悔と親への感謝の思いの歌だと味わいます。

わたしたちも、成長していく中で、親と意見が合わなかったり、反発したりしながら成長していきますが、その時は、なかなか親の想いに気づきません。それは、仏様の教えに支えられながら、仏様の恵みに気づかないわたしの姿でもあります。

法事やお墓参りの際に、亡き人を訪ね、「懺悔^{ざんぎ}」と「感謝」の念を新たにしたいものです。

教えて！

フダイシさま



お墓の方角が気になります。実家は浄土真宗ですが、
どの方角に墓石を建立するのがいいですか？（52歳女性）



基本的に方角を気にする必要はない。どうしても気になるのなら全部の面に同じ文字を刻んでおけば間違いないじやろう。どこが正面かわからず方角はなくなるからな。



人間は弱い生き物だから、方角に始まり大安や仏滅や根拠のない迷信に振り回されるんじゃない。そんな輩に限って歯にネーブル

*フダイシさまは永照寺の経蔵の中にいる。
たくさんの経典が収められた輪蔵をお守りしている。



のカスが挟まっていたりするもんじゃよ。
迷信（外）を気にするより、しっかりと自分（内）というものを
見つめた方がよほどためになるぞ。

お母さんからいつも「早く寝なさい」と言われます。
人間はなんで寝ないといけないのですか？（10歳男子）

成長ホルモンを分泌して疲れをとり、痛んだ身体を修復するた
めじゃよ。日中学んだことを脳に定着させる効果もあるんじゃ。
「そんな答えでは納得できない」？ うーん。そうだな。おぬ
しが寝ないと布団屋さんが困るからじゃよ。



しゃべるのが苦手で、クラスメイトから暗いと言われます。
クラスの人々と、どのように接していいかわかりません。
(16歳男子)

ワシも長いこと経蔵きょうぞうの中にいるから気持ちがよくわかるぞ。
黙っている男前はクールと言われるのに、黙っている普通の男
子は暗いと言われる。世の中は不公平の塊じゃな。

口ひとつに耳ふたつ。「話す」だけでなく「聞く」ことも大切じゃ
よ。この際、しゃべるより聞く方に専念して、クラス一の聞き
上手を目指してみてはどうか。

くらしの



知恵箱

感謝を求めると腹が立つ

せんがい
仙厓和尚の逸話を紹介します。

下駄の鼻緒が切れて困っているところに、豆腐屋のおかみが飛んできました。おかみはかぶっていた手拭いを裂き、手際よく鼻緒をすげてくださいました。和尚は下駄を受け取り、黙ってその場を去りました。おかみはムツとして、会う人ごとに、



「和尚は御礼のひとつも言わない」とぼやきます。

それを伝え聞いた仙厓和尚はこう思うのです。

「そうか。おかみさんは一言お礼を言ってほしかったのか。それは簡単だ。わしは、お礼を言って帳消しにせず、胸におさめて一生忘れないと思っていたのに」



いいも悪いもあなた次第

旅人が、見知らぬ街にたどり着き、長老に質問しました。

旅人 「この街はどんな街ですか？」 長老も質問で返しました。

長老 「前にいた街はどんな街でしたか？」旅人は笑顔で答えました。

旅人 「みんないい人で、食べ物もおいしくて、最高の街でした」

長老 は深くうなずき、言いました。

長老 「この街もそんな街です」

何日か後、前の旅人と同じ旅路を歩んできた別の旅人が、長老に同じ質問をしました。

旅人 「この街はどんな街ですか？」長老も質問で返しました。

長老 「前にいた街はどんな街でしたか？」旅人は鬼の形相で答えました。

旅人 「みんな意地悪で、食べ物もまずくて、最低の街でした」

長老 は深くうなずき、言いました。

長老 「この街もそんな街です」

こども部屋をノック

「集まり上手」と「集め上手」

ある幼稚園での出来事です。「ここに集まれ!」と先生に言われると、多くの園児たちが猛スピードで集合します。しかし、のんびりした性格のマサ君は、みんなが集合した頃にやっと気付いて動き始めます。ある日、マサ君は友達から「ノロマサア。カメマサア」と馬鹿にされ、号泣してしまいました。その日から、マサ君は元気がありません。

どうすればマサ君が遅れずに集合できるか、職員全体で話し合いが行われました。「マサ君には少し早めに集合を伝える」「できるまで特訓す



る」など、いろいろな意見が飛び交いました。その時、担任のアイ先生が声を発しました。「マサ君の隣りに立って、集合の合図を出すのはどうですか？」マサ君の性格を否定することなく、問題を解決する方法でした。

ひろせ たんそう
広瀬淡窓さんの言葉に「鋭きも鈍きも 共に捨て難し 錐きりと槌つちとに使い分けなば」というものがあります。鋭い錐にも、鈍い槌にも、それぞれに道具としての役割があるように、鋭い人も鈍い人も、大切な役割があるのです。教育する前に、個性を輝かす方法を考えるのも親のつとめなのかもしれません。

お坊さん

WITH

ナンタラ

お坊さんと乗り物

● 毎回ランダムにテーマを選び、エピソードを語ってもらいます。

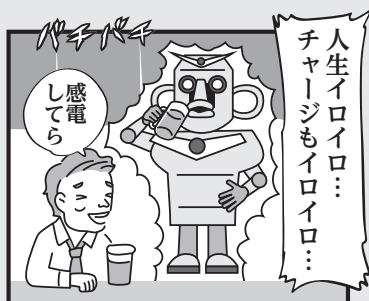
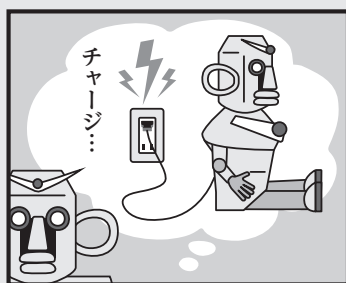
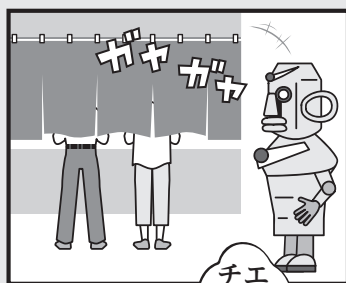


江戸時代は泊まりがけでお参りに行った場所に、今なら車で30分あれば到着します。たいへん便利な世の中になりました。たいていの僧侶は車かバイクでお参りしているようです。

そんな中、徒歩で汗を流しながらお参りされている僧侶の姿をおみかけすると、なんだか有難い気持ちになります。たまたま汗かきの僧侶が近くをお参りしているだけということもありますから、これは偏見かもしれない（汗）

お盆になると、多くの軒数お参りするためスクーターで移動している僧侶が多いようです。お待たせしないよう血相を変えて急ぐ姿は、まさに「暴僧族」です。

煩惱ロボット メカムラケン



門徒さんのおたより



墓前のラーク

ザアザアと雨が降る中、タバコの香りがただよってくると思い出すことがある。父が他界してもうすぐ一年。死後、はじめてお墓参りに行ったのは秋の彼岸だったと思う。母の願いで納骨は一周忌まで伸ばしたので、父のお骨は実家の仏壇に眠っている。わたしはふと思った。「父は今どこにいろのだろうか？」

秋の長雨で足元が悪かったのを覚えている。心が静かになるこの場所が好きで、小さい頃から一人でお参りすることも多かった。大きな傘に身をうずめ、やっとの思いで線香に火をつけて手を合わせた。感傷的に

なるでもなく、悲しみも押し寄せず……「ああ、父はここにはいない」
そう思った。

おもむろに、父が愛用していたラークを取り出した。ふだんタバコは吸わないけれど、気づけばぷうーっと口にふくませていた。傘にラークの煙が充満する。わたしの背後から、父の匂いが押し寄せた。雨音となまぬるい湿度の中、わたしは父といた。美味しい、と思った。

肺を悪くしても、最期までタバコをやめなかった父。父らしく好きに生きてほしいと、家族はそれを黙認していた。看取りの日々、父はよく縁側で一服していた。ラークの副流煙を胸いっぱい吸ったわたしの身体は、少しの毒と、いっぱいの慈愛で満ちている。（32歳女性）

浄土真宗本願寺派 小倉御坊



永照寺



公式
HPは
こちら



<https://www.eishouji.or.jp>

●「テラ・ヘルツ」は、みなさまからのおたよりを募集しています。文字数は自由。イラストも歓迎。ハガキやメールなどで、気軽にお送りください。

住所・名前・電話番号・年齢(任意)を明記の上、
下記住所までお送りください

〒803-0814

福岡県北九州市小倉北区大手町16-16

永照寺 テラ・ヘルツ係

テラ・ヘルツ 1

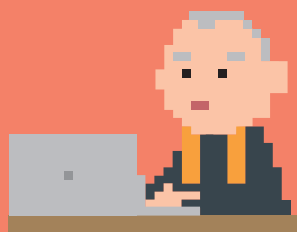
初版発行 令和4年9月1日

発行 永照寺

執筆 村上慈顕

編集 青木紀子

デザイン・イラスト 南佳奈江



To be continued...